

プログラム・ノート

解説=飯尾洋一



本日の公演について

今回演奏される5曲はどれもとびきりの名曲ばかり。華やかなスメタナの『売られた花嫁』序曲で幕を開け、山崎伸子のチェロ独奏を伴ったエルガーの「愛の挨拶」とチャイコフスキーの「ロココの主題による変奏曲」が続きます。ロマンティックで美しいメロディをお楽しみください。

そして、クロード・フランソワの「マイ・ウェイ」とは、あのフランク・シナトラの歌唱で有名な「マイ・ウェイ」。ポピュラー・ソングとしておなじみの一曲ですが、これをオーケストラで演奏したら、どんなサウンドになるのか、ご注目を。

最後に演奏されるのは、ベートーヴェンの『運命』。交響曲の代名詞ともいべき傑作です。経験豊富なマエストロ、円光寺雅彦が東京フィルとともに熱いドラマをくりひろげます。

スメタナ：歌劇『売られた花嫁』序曲 スピード感と歓喜にあふれた幕開けの音楽

Bedřich Smetana
1824-1884



ベドルジフ・スメタナはチェコを代表する作曲家。交響詩「モルダウ」がよく知られていますが、スメタナはオペラもたくさん書いています。代表作は歌劇『売られた花嫁』。まるで人身売買のような物騒なタイトルが付いていますが、オペラの内容は農村を舞台とした素朴な喜劇です。恋人をお金で他人に譲ったと思わせておいて、実はちゃんと結婚できるように策略が組まれていた。そんな知恵者の青年の活躍が描かれます。

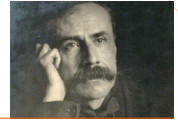
序曲はコンサートでとりあげられる機会の多い人気曲。冒頭は印象的です。急旋回して舞い降りるような高速パッセージで始まり、小気味よい弦楽器の細かい動きが続いて、次第に高潮します。やがて農村風の踊りの音楽が登場し、喜びを爆発させます。このスピード感あふれる軽快な雰囲気は、同じく結婚をテーマにしたモーツァルトのオペラ『フィガロの結婚』序曲と一脈通じるところがあります。



エルガー：愛の挨拶

作曲家から婚約者への贈り物

Edward William Elgar
1857-1934



大作曲家のなかで「愛妻家」という言葉にもっともふさわしいのが、イギリスのエドワード・エルガーでしょう。なぜ、エルガーにそんなイメージがあるのかといえば、やはりこの名曲「愛の挨拶」のエピソードがあるからこそ。作曲当時、エルガーは32歳になっても、まだまだ無名の作曲家にすぎませんでした。一方、ピアノの生徒であった恋人のアリスは陸軍少将の箱入り娘。境遇に格差がありすぎて、アリスの家族がふたりの結婚に反対したのも無理はありません。

しかし、ふたりは周囲の反対を押し切って結婚へ。エルガーの8歳年上だったアリスは、無名の作曲家の才能を信じて、彼の心の支えとなりました。エルガーは婚約記念として、この「愛の挨拶」をアリスに贈ります。自筆楽譜にはアリスの献身に対する感謝の念が綴られていました。

原曲はヴァイオリンとピアノのための作品ですが、ピアノやオーケストラなど、さまざまな編成のために編曲されています。今回はチェロ独奏とオーケストラによって演奏されます。

チャイコフスキー： ロココの主題による変奏曲

華やかに、そして優雅に。独奏チェロが大活躍

Pyotr Ilyich
Tchaikovsky
1840-1893



ロシアの作曲家チャイコフスキーがチェロ独奏とオーケストラのために書いたのが「ロココの主題による変奏曲」。「ロココ」という言葉には、あまりなじみがないという方も多いかもしれません。本来は美術の用語なのですが、音楽の世界で使われるときは、チャイコフスキーよりもずっと古い時代の優雅で洗練されたスタイルを指しています。つまり古風で貴族的な感じといえいいでしょうか。曲の冒頭で、オーケストラの序奏に続いて独奏チェロが奏でる主題が「ロココ」風というわけです。オーケストラの編成がコンパクトなもの、古典的なテイストを狙っているため。チャイコフスキーはこの「ロココ」の主題を次々と変奏させて、実に多彩な表情をチェロとオーケストラから引き出しています。

曲は作曲者の友人であったチェリスト、ヴィルヘルム・フィツェンハーゲンのために作曲されました。フィツェンハーゲンが勝手に作品に手を入れて出版してしまったことから、ふたりの友情にはひびが入ってしまったのですが、フィツェンハーゲンが改稿した版は好評を博し、現在でも広く愛奏されています。

クロード・フランソワ：マイ・ウェイ

フランク・シナトラが歌って世界中で大ヒット

Claude Antoine Marie François
1939-1978

「マイ・ウェイ」という曲はだれもが知っていても、クロード・フランソワという作曲家をご存じの方はあまり多くはないかもしれません。クロード・フランソワはフランスのシャンソン歌手・作曲家で「クロクロ」の愛称で知られていました。フランスでは大変人気のあるアーティストで、日本でも2013年に彼の生涯を題材とした映画『最後のマイ・ウェイ』が公開されました。

クロード・フランソワがフランス語で歌った「Comme d'habitude (いつものように)」を、たまたま耳にしたのがポール・アンカ。この曲をフランク・シナトラに歌わせようと、ポール・アンカは新たな英語の歌詞を書きました。シナトラが歌った「マイ・ウェイ」は大ヒットを記録し、以来、おびただしい数のアーティストたちがこの曲をカバーしています。日本でも尾崎紀世彦、布施明らが歌っています。卒業式でも歌われる曲です。

ベートーヴェン：交響曲第5番『運命』

運命はこのように扉を叩く!?

Ludwig van Beethoven
1770-1827



「ジャジャジャジャーン!」と始まる冒頭部分はあまりに有名。ベートーヴェンの秘書シントラーによれば、この冒頭について作曲者は「運命はこのように扉を叩く」と語ったということです。そこで交響曲第5番には「運命」という愛称が付きしました。

でも、どうやらこれはウソっぽい、シントラーの言うことには信憑性がない。最近はそのようなみなされています。同じ「ジャジャジャジャーン」について、ベートーヴェンの弟子ツェルニーは「キアオジという鳥のさえずりが題材になった」と証言しています。どちらが本当かは不明ですが、ともあれ、この運命の動機と呼ばれる「ジャジャジャジャーン」のリズムが、全曲を貫く重要な要素になっています。

第1楽章 アレグロ・コン・プリオ 緊迫感あふれる音楽が展開されます。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート ゆったりとした安らかな主題による変奏曲。

第3楽章 アレグロ 勇壮なスケルツォに、象のダンスのようなトリオがはさまれます。
切れ目なく第4楽章へ。

第4楽章 アレグロ 輝かしく壮麗なクライマックス。高らかに凱歌が奏でられます。

いいお・よういち（音楽ジャーナリスト）／著書に『クラシック音楽のトリセツ』（SB新書）、『R40のクラシック』（廣済堂新書）、『マンガで教養 やさしいクラシック』監修（朝日新聞出版）他。雑誌やウェブ、コンサート・プログラム等に幅広く執筆する。テレビ朝日「題名のない音楽会」他、放送でも活動。